

## 第154回 生涯現役講座 講演要旨

### 演題 『人間・衣服・文化』

～ヒトは衣服をまとうことで人になった～

講師 柳 洋子 氏

文化学園大学名誉教授

日 時:平成30年9月29日(土) 13:00～14:30

会 場:横浜市金沢区 能見台地区センター

参加者:30名



柳と申します。人間・衣服・文化というタイトルを見ると「どういう事」と思われるでしょう。人間はもともと人で人は生命体です。人間は素原料を使い衣服を生産・製品化をして、衣服をまとう事で人間になるという事なのです。人とは何かというと、集団とか社会とか国家というものを構成しており、その先に時代とか歴史とがある、

そういう見方をしていこうという事です。衣服それ自体は人体と人物がコミュニケーションをとっているという事です。ただ単にその辺のものを着ている訳ではなく、このワイシャツを着たら、この季節セーターが良いかな、グリーンが良いかなとか考えます。この事が実は皆様と衣服がコミュニケーションをとっているという事です。それは考えていくと、集団とか社会国家につながっていくものです。

衣服には必ず流行という言葉が出てきます。流行とはどういう事か、あらゆる事物にパターンとスタイルがあります。パターンとスタイルとは何か、パターンとは、例えばどこの世界の人もみんな口で物を食べています。また、どこの世界の人も下半身から排泄しています、これがパターンなのです。ところがその排泄する種類・内容が違う、これがスタイルなのです。例えばここにあるマイクですが、マイクという形のものがある、これはマイクとしてのパターンなのです。ところが手で持って胸ポケットに入れるとか、それはスタイルなのです。全ての物にスタイルとパターンがあるという事です。流行というのはスタイルが多様化し、いろいろなスタイルが出るのを流行と言います。

何故、私がこんなお話しをするのか、簡単に述べておきたいと思います。私は1953年、昭和28年日本に洋裁ブームがあった時に洋裁学校に入学して卒業しました。そのころの時代は街中にあちこち洋裁店が出来てきました。そういう時代、文化服装学院裁断科に入りました。何故裁断科だったのかひとによく聞かれました。実は洋裁ブームで、私の母は和裁が

出来るものですから、洋子は洋裁をやりなさいということで、文化服装学院に入学の手続きに行きました。秋でしたので、基本的な科は一杯で裁断科しか空いていませんでした。裁断科に入ることになって、入るかどうかは入学式の時に決めればよいという事で、学生証を貰ってきました。そして入学式に行った時にいろいろな先生の中で、黒のベルベットのロングドレスをお召しになった、お人形さんみたいな先生がいました。あの先生がいらっしゃるなら入学しようと決め、幸せなことに担任はその先生でした。

入学して最初ミシンを踏んだとき、「なんでミシンが反対に踏めるの」と先生方が感心する程で私は面白い存在だったと思います。やがて基礎縫いをやり始めました。男性は知らないと思いますが、ブラジャーとかショーツとか全部最初から作ります。「キャラコ」という生地でブラジャーもコルセットも、お母さんの帯の芯地でコルセットを作りました。そういう時代の洋裁を勉強いたしました。やがて上級に進学しなさいと言われ、私みたいな者が上級に進学していいのかなと思いながら進学しました。上級で何をやったかと言いますと、男性の皆さんお召しの背広、三つ揃いを全部仕立てました。12月1日からはじめて、24日クリスマス日に仕上げました。400人受けてそのうち40人が合格で私のクラスは30人近く合格し、担任の先生が大変喜んでいました。三つ揃いですから、ちゃんとチョッキもあり、私は父の背広を仕立てました。

そんな時代でしたが、大変なのは夏です、当時は扇風機も勿論クーラーはありませんでした、「デシン」という絹に近い生地を買いまして、スリッパに総刺繍なのです。汗を沢山かきますので洗面器に水を汲んでタオルを置いて、いちいち一針一針縫っては手を洗い、「デシン」のスリッパを仕立て上げました。その「デシン」のスリッパを結婚衣装に使おうと思って、保管して置いたらいつの間にか、黄色くなって使えなくなってしまいました。

当時は日本海で鯨が上がると、船の上に乗せ見学させてくれました。何故かというところ鯨の髭をドレスの骨格(芯)として使っていました。そのようなこともあり鯨を見て来いと言われました。南氷洋から鯨が来て、半身だけ船に乗っていました。鯨の半身を船員さんが私たちに、滑り台みたいに滑ってみたらと言いましたが、誰も滑ろうとしないので、私が鯨の頭から尻尾まで滑り、後で大恥をかきました。スカートがびしょびしょになってしまいました。楽しくまたいろいろな事がありましたが、洋裁を一通りマスターいたしました。このような経験を通じて今日の様な洋服に関してのお話出来るものと思っています。

私が入社の社会から歴史とか国家というものを何故考えるのか、これはたまたま私が社会学というものを学習したからです。社会や歴史・国家というものに衣服を通じて考えることが、出来るのだと思います。

現在着ているものを見てみると、皆さんは絹なんか着ていないと言われると思いますが、今は合成繊維の時代で、衣服の材料の中に絹が混入されています。特に素原料から見ると繭(絹)、綿(木綿)、合成繊維の三種類が今の社会に存在しています。繭なんて今頃何故と言わ

れると思いますが、新しくなりました高校野球の優勝旗は絹で出来ています。お相撲の行司服・まわしも絹で出来ています。お布団も絹で出来ています。絹の素原料は繭で、蚕が白い物を吐いたものが繭です。出来れば私も繭が欲しいのですが、そう簡単に手に入るものではなく、繭は大変大事な物になっています。

後でお話ししますが、日本の民主主義社会の礎となった自由民権運動は実は繭が自由民権運動に繋がっています。また、絹がアメリカの赤ちゃんを救ったという話もあります。本絹の肌着がないと命が危ないという、過去百年に三つの例しかない赤ちゃんの病気の子がいました。アイダホ州に住む生後二か月のトラビスちゃんという子で、肌が敏感で少しの摩擦があっただけで、全身に傷がついてしまう病気でした。これを聞いた日本の商社マンが、日本の白の羽二重二反を取り寄せてプレゼントしました。それを着せることによって、皮膚の障害が無くなり、赤ちゃんの命を救ったというものでした。

日本の絹は皇居でも育てていて、「小石丸」というのが日本独自の繭です。天明皇后(大正天皇の皇后)の時代から、美智子皇后もお育てになり、後に皇后になられる雅子様もお育てになると思います。日本の皇室は男子である天皇陛下は稲を育て、皇后陛下は絹を育てられるなど、日本の産業の基本を継承されてきています。このような事が日本の皇室の大きな特徴であり、紅葉山御養蚕所で蚕を飼われており、世界でも有名になっています。5月1日から御養蚕が始められ、「御養蚕始儀」が行われます。三種類の蚕で、12万～15万頭が飼育されています。美智子皇后はご自分の手で、桑の葉をあげる等の作業をされています。このように、皇室は日本の産業を伝統的に支えてきていると言えます。

私は福島県で育ち、子供のころ蚕は「お蚕様」と呼ばれ「様」が付きますが、私は洋子と呼び捨てでした、それくらい蚕は大事にされてきました。蚕は2～3センチの白っぽい虫で、体の中にセリシン(絹の主成分で硬たんぱく質)とファブリン(血液の凝固に関わるたんぱく質)という物質の二本の管があり、それを使って糸を吐きます。糸を吐く時に、蒺(まぶし)という足場を作ってあげます、私の所では藁を使っていましたが、今は箱でも出来るようです。足場を作ってあげると蚕は自分で足場を組み、糸を8の字で体に巻き付けていきます。巻き終わると中で、蚕は真っ黒になって生きています。その時に繭を煮ないと糸はとれませんが、煮ないと蚕が蛾になって穴を開けて、出て行ってしまいます。穴を開けると普通の絹としては、使えなくなってしまいます。私が子供の頃は、母が鍋で煮てくるくと糸にして、真綿を作り風邪をひくと喉に、また布団と枕に使っていました。

先ほど繭が自由民権運動に大きく関わっているとお話ししました。12月2日・3日行われる秩父夜祭は、秩父事件というのがあり、それを慰めるために行われていると言われています。秩父事件とは、1884年明治17年11月藩閥政治に反抗した人民の自由と権利の主張を鼓舞した自由民権運動です。

秩父は埼玉県西部にある盆地で多くの蚕を飼う地域でした。生家は名主だった田代栄助が

秩父事件の革命軍の総理として戦い没しています。井上传蔵は棕神社の前の農家の生まれで自由党员として戦い、後に北海道で村長までした人物でした。秩父事件が明らかになったのは、井上传蔵が北海道で後に話したことが、講談師の口に乗ってラジオを通じて日本中に知られることになりました。

何故、小さな繭が大きな自由民権運動に繋がったのか、それは生産した繭を買う人がいて、大量に取れた年は沢山取れたから安くしろと言ひ、少ない年は少ないから安くしろと買いたたかれてしまっていました。生産してもお金にならず困窮した生活が基本にありました。秩父は盆地で山深く、官憲が見張っても何人でも集まって相談できる場所が沢山あり、秩父事件が蜂起されましたが、たった10日間で鎮圧されてしまいました、田代栄助は今まで自分が助けてきた農民に密告され逮捕され死刑になってしまいます。一生懸命世話をしてきたのに最後に官憲に渡されてしまいました。これを私は農民を責めることは出来ません、自分が生きる為に、そんな時代背景のなかでは私もそうすると思います。日本の農民一揆にはそういう原点があると記憶に留めたいと思います。井上传蔵は蜂起した棕神社の前の農家に匿われて、一月後くらいに北海道に逃げる事ができました。当時ですから北海道に逃げるまでには沢山の人々が関わったと思いますが、誰一人告発するものが無く逃げられたのです。ところが田代栄助は、よく面倒をみた農民に官憲に売られてしまいました。このような二つの出来事が日本の自由民権運動の柱だと私は思っています。繭と自由民権運動の関りについてご理解いただきたいと思います。

次に木綿についてですが、ふわふわとしたコットンボールというものを糸にしたものが木綿になります。昭和はこの木綿が社会を支配した時代でした。私が洋裁を始めたころ「キャラコ」という言い方をされていて、真っ白の糊がついていました。「チャコ」という生地を印を付ける物を使うと後で洗濯すると白い糊が落ちて、生地が出てきてしまうので、生地を洗うなどと言われ大変苦勞致しました。木綿でワイシャツを作りましたが、襟の先にミシンが入る時には息をしてはいけないと言われるくらいに集中しなければならず、ワイシャツを作るのは大変でした。

卒業制作は木綿を使ってドレスも作りました。木綿は布目がキッチリしていて縫いやすかつく良く出来ます。昭和は木綿の時代だったと言えます。現在はアメリカ産が全世界の三分の一を占め、日本の生産はほんの僅かとなっています。

木綿が昭和の社会を支配し、絹が明治を支配していた、現在社会は合成繊維が支配していると言えます。合成繊維は便利なもので、大手の会社で行っているコンピューターグレーディングで裁断するとき、布目というのを無視し入るだけ型紙を入れると、洋服はいくらでも出来るのです。安く出来るのですが、洗濯するとよれよれになってしまうような物になってしまいます。ネクタイは正バイアスと言う、四角い生地を斜めに切ると綺麗なネクタイが出来、高価になります。安いネクタイは両端を使うので安価に出来るのです。布目を無視し

て、生地にかに多くの型紙入るかという効率が優先される風潮があります。安いからといって沢山買わないようにして欲しいものです。

合成繊維は大量に生産できるので、我々は大量に消費することができ、大量に廃棄することになり、これが問題になってきています。ストローだけでなく、プラスチック製品全般に言えます。かつてプラスチック産業の人に、プラスチックを作り過ぎて困りますねと尋ねた時に、その人に出来たものを逆さまにしていけば素原料が出来るので心配ない、と言われた事がありました。そのような事が大量廃棄という問題となっている訳です。

現在、蚕をもう一度見直そうという機運が生まれてきました。高齢者のお宅に蚕と共に桑の木も鉢に入れて配り、毎日蚕のお世話をしてもらおうというものです(介護＝蚕)。高齢者の方が生物に対する関心を持っていただくと同時に、繭を作ることが出来ます。繭を扱う企業に買い上げていただき、いろいろな物に活用しようということです。繭が大きいとか小さいとか形が悪いものとか出来ても、糸だけでなくいろいろな産業に使うことが出来るので大丈夫です。例えばUVカットの化粧品の材料に使うなど新しい使い方が出てきています。

東北は水害で農産物がダメになりましたが、水害に強い綿の種を蒔き育てるコットンプロジェクトが発足されました。東北コットンプロジェクトは高島屋が商品を作り、日本航空が機内誌で定期的に紹介する活動などを行っています。通販大手のフェリシモも東北コットンを使ったアクセサリーの販売をしています。洪水という禍にもいろいろな製品を作ることで、人々の生活を救うことができます。かつて日本がやってきた、基本的な蚕、基本的な綿がこのような時代に役に立つということを記憶に留めて頂きたいと思います。

衣服についてですが、ご存知の八甲田山死の彷徨の起こった問題は、男性の方々はリーダーシップの問題として教材にしていますが私は違うと考えています。なぜならば成功したチームはその地域がどんな衣服を着ていたか調べていましたが、失敗したチームはそんなことを調べず、ただスケジュール通りにいけばいいと思っていました。大事だったのは衣服で特にズボンの前開き(当時は天狗という)は、現在殆どファスナーですが当時はボタンでした。ボタンを開けようと思っても、雪で手が悴んでしまって外せなくなります。外せないうちにおしっこが漏れて、五分もしないうちに凍ってしまい歩けなくなります。ズボンの天狗の問題もあの事故を起こす原因でした。一方のチームはおにぎりなどを握ると身体の中にしまい込んで、身体を暖かくしながら歩いたので成功したのです。ズボンの前ボタンが原因で歩けなくなり、命を落としたということを業界で発表し、本にも書きましたので、出版社からえらく叩かれました。また、雪の中で何が必要だったのか、それは靴です。成功したチームは藁靴を履いて暖かく保っていたのですが、失敗したチームは軍靴で革靴は凍ると重くなり歩けなくなってしまったのです。

合成繊維の合成とは二つ以上の物を合わせて一つにすることです。ナイロンはアメリカで開発されましたが、日本で初めてビニロンというポリビニールアルコール系の合成繊維を、

桜田一郎という人が1939年開発しました。酸アルカリに強く医療・漁網・ロープなどに用いられる日本で初めて開発された合成繊維です。

日本の高度経済成長は、合成技術が産み出したものだと考えています。繊維・プラスチック・日本に高い建物が沢山建つのも、合成技術の成果です。ただ、問題は廃棄されたときにどうするのか考えないことです。壊した時に壊した材料をどこへ捨ててどうするか考えておかないと私はダメだと思います。

繊維についても同じことが言えると思います。今、繊維はいろいろな物に使われ、飛行機も繊維を使っています。繊維は蚕とかコットンボールとかだけで無くもっといろんな事に使われています。繊維を燃焼させ新しい繊維も出来、軽く強いからという理由で飛行機や自動車に使われています。繊維に関して私たちが見過ごしている問題が沢山あるのではないかと思います。昔ナイロンでフランス人形を作った時、ナイロンは熱に弱くアイロンで焦がしてしまった事がありました。今は、アイロンの温度で調整できるようになっています。

衣服は人体と人物のコミュニケーションであり、皆さんさりげなく着ている訳ではありません。皆さんの身体と健康状態と出かける場所を考えながら、自分の体とコミュニケーションを取って、衣服を選んでいるのです。

人が集まって集団が出来、集団が出来ていくにしたがって、秩序が必要になると制服という問題がでてきます。最近制服はあまり良くないとされているようですが、私は制服があったほうが良いと思っています。自由になってきている事が人間の問題として何を与えたか考えてみたいと思います。自由とは好き勝手することではなく、自由は枠組みがあってその枠組みの中から自分で選ぶ事をいいます。枠組みの無い自由というのはありません。それをはき違えて何でも好き勝手にすることが自由だということが、今の制服の論理になっています。本来制服は、きちんとした制度と制度にある精神と着る側との精神が合致して制服は出来上がるものと思います。ユニフォームはそれぞれが好き勝手に好きなようにするものです。

服装はある意味いろんな問題を孕んでいると思います。これから先合成繊維が発達していくと、廃棄の問題が出てきます。燃やしてしまうとただ煙が出て害となるので、考えなければなりません。また合成という技術がいろいろなものを可能にできています。合成技術は田圃も畑も要らない、「蒺(まぶし)」も要りませんが、もう一度繊維の問題を考えていく必要があるのではないかと思います。洋裁をやって社会学をやった人間が、今日のようなお話をすることは、あながち不適當な事ではないと思います。歴史を紐解くと、封建時代の衣服は全部絹だと思います。皆さんがああ時の絹は誰どうやって縫ったのか、という事を思い返すのも勉強になると思います。自分が着ているものそれ自体が歴史に繋がっている、ということをそれぞれが考えてみて頂きたいと思います。

パターンとスタイルの問題は、私の得意とするところです。パターンは伝統につながり、スタイルはその伝統を枠組みとして選んでいける、これがスタイルだと思います。パターン

とスタイルの力関係でスタイルの力が大きいのが現代社会です。だから新しい製品を作って買われていく、そして古い物はどんどん捨てられていく。パターンとスタイルを文化という観点で考えてみると、パターンを大事にしている国はイギリスが典型的だと思います。ありとあらゆるところに鬘鑠として生きている。日本はさっさとパターンを捨ててスタイル・スタイルとなっている。このような事を問題として考えても良いのではないかと思います。

和服(着物)は直線断ち直線縫いで、洋服は曲線断ち曲線縫いです、日本のビルは直線断ちです、ビルについても直線なのか曲線なのか、それも一つの問題で、洋服、和服についても同じことです。和服を褒める時に、正面から褒めてください。帯とか、洋服は脇から褒めてください。ネクタイもそうです。世界中から嫌われている彼のネクタイは脇から見ると、アールがついています、だからカッコ良く見えます。日本人のネクタイは身体に「ぺちゃ」とくっついていて、カッコ良く見えません。洋服は必ず脇から見て褒めてください。和服は正面から褒めて下さい。それは直線断ちと曲線断ちの違いなのです。

現在のスポーツウエアは、直線、曲線の問題でどこに力点が置かれているか見てみると、何分の一秒を争う上で、どんな繊維を使うのか、布目はどうなっているのか、縫い方がどうなっているのかと、大きな論点になっています

私が大学に通っていた当時、洋裁学校から来た女の子と言われ、一年生の下級生までが三年の私に対して洋裁学校から来た女の子と言うのです。洋裁の事を半分馬鹿にしていました。洋裁を馬鹿にした人達がなにをやれたのだらうかと思います。「社会はファッション化社会」ですという論文を書いたのは洋裁学校を出た私です。ファッション化社会という言葉も生まれてきました。

洋裁ということに留まらず大事なことは、直線断ちなのか曲線断ちなのかということであり、その思いをもって街の中を見てみると面白いと思います。日本の柱は真っ直ぐ(ぺったんこ)で、西洋の柱は丸く(アール)なっている。円形と直線の話は着ているものから一般の物にも影響してきますので面白いと思います。そういうことが実は社会を見る目ですし、世界を見る目にもなると思います。

今、犬が洋服を着て歩いている、犬も洋服を着ていると可愛いものですが、犬によっては洋服を持ち出すと散歩だと思って喜ぶそうです。以前、友達が暑い日に犬に洋服を着せ散歩させていました。素足なので犬が嫌がっているので「道路は熱くて嫌がっているから犬用の靴を買って散歩させて」と、言った事を覚えています。犬に洋服まで着せるような時代になりました。時間となりましたので終わりいたします。(文責 世話人 中村 猛次)

### <謹告>

前回の講演「昭和天皇と相模湾の生物」の記録に対して、講師から訂正の要請を受けました。ホームページ上で修正しておりますので、ご参照下さい。